

2月8日(土)渋沢栄一研究会

Zoomにてご参加の方へ

おはようございます。ご参加ありがとうございます。

この画面が見えている場合は、Zoom入室ができています。

10時開始ですので、このままお待ちください。

12月14日 東條さん資料
(再掲)

「渋沢栄一から始める研究会」

⑧ネクストステップとして、わが国の経済人及び社会の指導層への行動原理として、渋沢栄一が愛した「武士道精神」の必要性などが挙げられるという視点

・新しい社会を形成していく際に求められる考え方、思想、哲学がある。
江戸時代（あるいは幕末と明治維新誕生をも含めて）までにあった、民衆の中にまで浸透していた「武士道精神」という日本的な価値観を考へてみることは、本渋沢研究会の本流の一つでもある。

新しい社会の哲学と同時にそれを成し得ていくリーダー論とリーダー像がある。またリーダーを支えていくグループを研究する必要がある。

- ・それは民衆主義（ポピュリズム）なのか
- ・それともエリート主義なのか
- ・我が国の近未来との関係性は？
- ・世界への通用度は？

*1 武士道の真髄『葉隠』奈良本辰也

*2 CGC 価値協創のガイダンスより（必須項目）
（価値観、長期戦略、実行戦略、成果、ガバナンス）

*3 渋沢栄一記念財団プロジェクト日米英仏8名 2011～

*4 ハーバード10名の教授のインタビュー

“世界に日本と言う国があって良かった”
アマルティア・セン/ノーベル経済学賞

“渋沢栄一ならトランプにこう忠告する”
ジェフリー・ジョーンズ

【仮説】

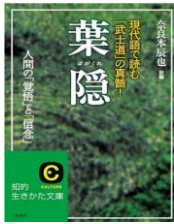
- ・明治期、渋沢栄一の『論語と算盤1916』は日本的資本主義の精神となった。
今、その「武士道精神」は、行き詰りつつある資本主義に新たな息吹を吹き込む。
- ・その「武士道精神」は、日本のみならず世界にツウヨウスル

【検証】

- ・米国など先進国では欲望の資本主義の進展で社会は崩壊しつつある
株主資本主義、CSR、CSV、ステークホルダー資本主義へと
- ・日本には、倫理資本主義の数百年に及ぶ実践智としての「武士道精神」がある
戦後復興、高度成長期、グローバル化、失われた30年、パーパス経営へと
- ・欲望の資本主義（我欲）と倫理資本主義（武士道精神：利他）は対立する。
前者は個人に帰する。
後者は家族、知人、上司、社会、国家、世界、仏神へとつながる。
- ・大和の心は、調和&真善美を求める心、うちに大和魂≡武士道精神を秘める。
- ・日本企業に広がりつつある *2
『パーパス経営2021』（志本主義、合本主義）名和高司
志本経営の原点は渋沢栄一『論語と算盤』そして「武士道精神」
- ・武士道精神の世界に広がる環境ができつつある
『武士道1900/1908』 新渡戸稲造
『BUSHIDO CAPITALISM2021/2022』 櫻田謙悟
『倫理資本主義2024.6』日本から、日本なら、マルクス・ガブリエル独
アニメのヒーロー世界へ急拡大、輸出：2000憶/2001⇒3兆/2023
学びたい言語は日本語5位（1英、2西、3仏、4独、5日）
- ・世界は解を求めている。
米欧は崩れつつあり、答えを求めている。
騎士道精神、ESG、SDGs、ステークホルダー資本主義？
『グローバル資本主義の中の渋沢栄一2014』 *3
『ハーバード日本史教室2017』 *4
- ・世界はブロック化してきている。世界の平和と発展には
⇒渋沢栄一の『論語と算盤』と「武士道精神」が必要とされている
（武士道精神：和の心、仁の心、愛の心と義、礼、智、信、勇、忠、名誉の心）

武士道の真髄——『葉隠』を読む人のために 9

- ▽人間の「覚悟」と「信念」の書——『葉隠』の魅力 9
- ▽「武士道」そのままに生きた、山本常朝つねむねの生涯 12
- ▽「葉隠」という書名が生まれた背景 21
- ▽すべては、最高に生きるための知恵 24



1章 いかにか「生きる」か

- ▽「葉隠」——鍋島家が「他家に勝る家柄となった」理
- ▽「七度生まれ変わるならば、七度とも当藩に生まれな

2章 いかにか「覚悟する」か

- ▽一つの極意——「その日を最期」と定める 40
- ▽武士とは「死物狂いになる者」のこと 44
- ▽いまこのときに「すべてがある」と思う 45
 - 1 とにかく「出端をくじく」 45
 - 2 いまを「一心不乱に生きる」 51
- ▽「七つ呼吸する間」に腹を決める 54
- ▽四十歳からの「意地の立て方」 57
- ▽大高慢の効用「自分に並ぶ者なし」 59
- ▽「勝つ」ための絶対条件——機会を読む 65
- ▽仇討の掟——「勝たなければ」と思うと勝てない
- ▽一芸を持つ者は「芸者であつて侍ではない」 71

3章

いかにか「仕事する」か

- ▽御奉公——「人目を引くような武士は本物ではない」 80
 - 1 人に仕える——「打ち込みすぎ」くらいがいい 80
 - 2 仕事の基本——「不可欠の人」になる 83
 - 3 「伝える」力——上下をつなぐ「以心伝心」 88
 - 4 苦心——「他人に関する悪事」は憎まない 93
 - 5 出世——「にも二にも」功を急ぐべからず 98
 - 6 心づくし——「最初の呑み込み」が大事 101
 - 7 君臣の間——「人知れず思う恋」を手本とする 103
 - 8 人を育てる——「一飯を分けて食べさせる」心 106
 - 9 才能——十のうち三つか四つは「しまっておく」 108
 - 10 主命——「背くべきとき」がある 111

4章

いかにか「人と付き合う」か

- ▽いかに「諫言する」か 117
 - 1 「平素の養生」を心がける 117
 - 2 「譜代」の部下、「外様」の部下 127
- ▽武士の行ないは「死後にまで表われる」 130
- ▽忠告の技法——「渴いた喉のどに水がしみわたるように」 138
- ▽相談の技法——「大木の根になったように」 145
- ▽議論の技法——ときに「黒を白」と考えてみる 148
- ▽付き合いの技法——器でなく「器に備わった徳」を貴ぶ 151
- ▽人を使う技法——「甘すぎず、辛すぎず」の加減 156
- ▽日常の作法——朝四時から夕までの鍛練法 163
- ▽身なりの作法——「どこかに強さがにじみ出ている」のがよい 168
- ▽言葉の作法——「いらぬこと」で敵をつくらぬ 170
- ▽臨機応変の技法——「角を立てない」心の働き 175
- ▽和の技法——「恥をかかせてはならない」 180
- ▽教育の技法——「手本」を真似させる 183
- ▽酒席の心得——「盃」をどこでおさめるか 185

5章

いかにか「自分を高める」か

- ▽修行——「自分流」の落とし穴 194
- ▽今日一日の反省——「残念記」の効用 199
- ▽克己——潮満ちれば「船」高し 202
- ▽健康——毒蛇は「七度焼いても回復する」 204
- ▽風流——「花の形は悪いが、活けぶりは見事」 206

6章

いかにか「運をつかむ」か

- ▽孝——天・地・人を貫く「不思議の道」 211
- ▽婦道——優しさのなかに「強さ」を見る 217

- ▽「時の運」をつかむ法 222
- ▽わが鍋島家は「醜男が名物」 227
- ▽人間の「信念」——いかに貫くか 232

葉隠 (知的生きかた文庫
2010/6/21奈良本辰也 (翻
訳)4.1 521 20241031

2月8日 東條さん資料

中国からの思想（道教、儒教、仏教）と 武士道精神

道教 経典：道蔵

BC5C 老子：「道德経」（道タオ：宇宙の原理、徳、無為自然）
エゴを捨て道に沿って生き、平和と調和を求めよ“上善如水”
BC4C 荘子：「荘子」（自然と調和し自由に生きる“真人” “胡蝶の夢”

BC3C -AD3C: 道教（五斗米道・太平道-黄巾の乱）
不老長寿、不老不死の薬（煉丹術）
気の修練（瞑想・呼吸法、養生）
+古くからの民間信仰（陰陽五行、鬼神信仰）

4- 10C 晋南北朝隋唐：三教交渉（仏教・儒教・道教）
⇒浄土教・禅宗 ⇒道教「三洞四輔」
唐（仏教/華嚴・天台・禅・浄土宗、儒教、道教）

12 -17C 宋・明 儒教再評価、三教帰一
17C 清：儒教/科学継続、仏教、道教容認、キリスト教警戒
雍正帝：仏教をもって心を治め、道教をもって身を治め、儒教によって世を治めよ。

中国人の人生観・世界観であり、東アジアの思想・文化・芸術への影響

日本へ影響：5・6C頃から
・修験道（山岳修行）・陰陽道（陰陽師、呪術、お札）
・書、画（仙人、山水画）・気功、鍼灸、医 ・寓話（浦島太郎）
・暦（節分、節句、七夕、盆、お中元）・占い、風水

現在：中華人民共和国1949：宗教否定、改革開放1978：一部認める
道観&寺院（観光化）、孔子学院（政治武器化）

道観1万、関羽廟

《考察》 武士道精神◀儒教+仏教（禅←道家の影響）+日本の大和魂
道家の思想⇒西洋への影響：個人の生き方、ユングによる養生法の紹介
⇒禅⇒マインドフルネス・リーダーシップ・スポーツ・断捨離

日本の三教：平安：本地垂迹説、鎌倉-江戸：神仏習合が基盤、明治：神仏分離令、20C後半：神仏習合的文化の復活

仏教

BC5C イト 釈尊（小乗、大乘、密教 経典：大蔵教）
無我、空、縁起の理法、転生輪廻、苦
四諦八正道、上求菩提・下化衆生（菩薩行）
5C 印（大乘・密教）⇒中国

6C 中国⇒日本、7C 聖徳太子(大乘)
8C 奈良の大仏（大日如来信仰）
5C 浄土宗（阿弥陀如来信仰）⇒⇒12C 法然
6C 禅宗（達磨・慧能）⇒13C 栄西・道元

寺院3~4万

儒教

BC5・4C 孔子・孟子（経典：四書五経）
大学・中庸・論語・孟子 12C
易経・書経・詩経・礼記・春秋 BC5C
・子、怪力乱神を語らず
・鬼神を敬してこれを遠ざく

5C ⇒ 日本

6C-1905 隋-清:科学（五・元は政治統一なし）

12C 宋 朱子（朱子学）⇒17C林羅山
15C 明 王陽明（陽明学）⇒17C中江藤樹
⇒17C 江戸 儒教中心の治世
孔子廟 200~300

《参考》

- ・道教の歴史と構造 1999 福井文雅 五曜書房
- ・中国人の宗教・道教とはなにか 2006 松本浩一 PHP 新書
- ・道教思想10講 2020 神塚淑子 岩波新書
- ・中国思想史 2022 武内義雄 浅野裕一 講談社文庫
- ・龍樹・荘子 1990 前田利鎌 岩波文庫
- ・哲学と宗教前史 2019 出口治朗 ダイヤモンド社
- ・他

DN道教について 濱名さん資料

道教について

2024年(令和6年)12月25日 濱名均

道教とは

- ・中国で生まれた宗教
- ・中国の人生観や世界観の根幹をなし、東アジアの思想や文化、芸術のベースとなっている

道教の特徴

- ・老子を祖とする

老荘思想とは

- ・「老子・荘子」が説いた思想である。孔子の儒教とは異なり、個が個として本来的価値を回復しそれぞれの立場に安住することを理想とする徹底した個人主義、世俗的常識的価値観を根底から覆す教えである。(米国のリバタリアンと似ているのでは)
この思想を基にした「道教」の神様でもある「黄大仙(ウオンタイシン)」とは縁がある。
- ・老子と荘子によって提唱された思想体系を指す。これらの思想家は、古代中国の春秋時代から戦国時代にかけて活動した。
- ・老子は「道」(Dao)タオという概念を重視し、自然の法則に従って生きること、無為自然、柔軟性、無欲などを強調した。「上善如水」の有名な言葉も教えの中に含まれる。

- ・人間の決めたルールではなく、宇宙の原理としての「道・タオ」に従うべきと考えた。
 - ・儒家の主張する仁義は、世の中が乱れているからもてはやされるだけである（「大道廢れて仁義あり」老子）
 - ・儒家の「道」が現実的な生き方を意味しているのに対して、老子の「道」タオは万物を生み出す原理のことである。
-
- ・莊子（紀元前369年～286年頃、中国戦国時代の思想家）は「莊子」と呼ぶ著書でその思想を伝えた。老子の教えを継承しつつさらに発展させ、相対主義、自由奔放、夢遊などの概念を提唱した。
莊子は人間が自然と一体化し、自由に自己を表現することを強調した。「一切あるがままに受け入れるところに真の自由が成立するという思想」「心はいかにして自由になれるのか」その思想は、のちの中国仏教、すなわち禅の形成に大きな影響を与えた。彼の寓話やたとえ話（小説的）は、その思想を理解するのに重要な手がかりとなっている。
-
- ・老莊思想は、道家思想の中心的な一派であり、儒教や法家など他の中国の思想とは異なる視点を持っている。老莊思想は人間や社会に対する自然主義的なアプローチや、相対主義的な価値観、非行為主義、無為自然などの概念を通じて、人々に平和と調和を求める道を示唆している。

- ・世の人は、もともと一つであるはずのものを可と不可に分け(この見解は西洋思想の近代合理主義における「分別」と同じ)、ちょうど道路が人の通行によって出来上がるように、世間の人々がそう言っているからという理由で、習慣的にそのやり方を認めているにすぎない(莊子、齊物論・せいぶつろん編)
- ・小さなエゴを捨て、宇宙の(道=タオ)に思いをよせて、自然のまま、ありのままに振舞えばよい。宇宙の流れに同調する姿=逍遙遊(しょうようゆう)と呼ぶ、そのような境地に到達した人を「真人・しんじん」であるとする。またこの世は夢のようだと説く。
このように世界をありのままに見れば、人間社会はちっぽけな存在であり、小さなことが気にならなくなる。このとき人は混沌(カオス)たる世界の中で自由に漂う仙人のような存在になれるのである。(濱名はここがメインの思想とみている)

上善如水の意味

- ・自らを主張することなく、様々な器によって自らの形を変えて争わない。そして皆が嫌がる下の方に身を置く。水のように生きるとは、居場所をよい大地にし、澄んだ淵のように静かな心境でいる。仲間には仁を、語らいには信頼を、良い政治で治め、良い仕事をして、時を失しない。水の偉大なところは万物に準じて争わないところであり、咎め（とがめ）られることも無いのである。
- ・年長者を敬えと説く「儒教」。時代がマッチすれば善であるが、そうでなければ悪ともなり得る。（日本経営の「年功序列」の概念・秩序は、そういう意味では戦後復興期と重なっていた高度経済成長期、特有の価値安定時代の産物ではなかったのか？カオス（混沌）が常態化しているワールドワイドな環境下にある現代日本では「悪」かもしれない）。しかし、「老いた木にも花は有る」という世阿弥の言葉は、儒教とは違う「老境」の良さを説く。

道教の歴史

・六朝時代後半になると、儒教や仏教が「儒教」「仏教」と呼ばれるようになり、拡大した。

「道家」も「道教」と呼ばれるようになった。

・明治時代になると、西洋の諸概念が輸入され「宗教」という言葉と概念が創出された。これにより「道家」は老子・荘子の哲学、「道教」は宗教という振り分けが行われた。

しかしながらこのような「道教」は必ずしも19世紀以前の中国の歴史を生きた中国人の考え方や言説に即応していない。

道教の影響

・浦島太郎や七夕、お中元などの習俗に影響を与えている。

・美術には仙人や北斗七星の星座を擬人化した図像がある。

道教の主要な経典

・三洞四輔～「三洞」とは、洞真部：仏教の影響が強い経典群。洞玄部：老子と易の思想を基盤とした経典群。洞神部：老子を神格化した太上老君の教えをまとめた経典群。

「四輔」とは、太平部：太平道という宗教結社の経典群。上清部：上清派という道教の派閥の経典群。靈宝部：靈宝派の経典群。正一部：天師道という派閥の経典群。